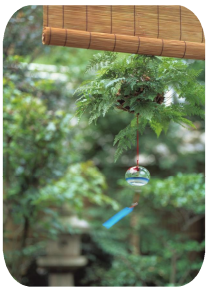
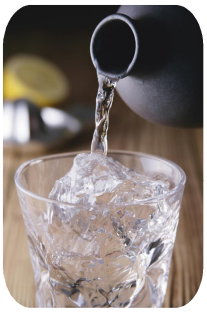
2016

# 友引町内会通信

Vol.198

8

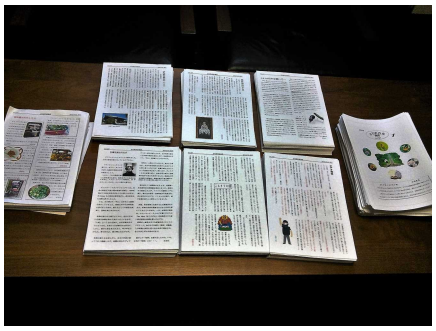




夕立や豆腐片手に走る人　　正岡子規

明治の頃、豆腐を買う人は竹で編んだ豆腐籠を提げていったそうですが、この人は手に持っていたのですね。突然辺りが暗くなって夕立に襲われ、豆腐片手に走り出した。激しさを増す雨。濡れながらも豆腐だけはつぶすまいと焦りながらスピードを上げる。端から見ると面白いですが、この人の夕飯はどうなるのか。

# 普段着のわたしたち



寺務局で印刷された友引町内会の原稿です。これから読み易いように並べ替えて一冊に纏め上げるのが編集です。発送まで 3 日はかかります

幽思房

梅雨時に重宝した車のガラスの撥水剤。ただ、高速道路走行前は塗りません。何故なら、120km/h を超えるとワイパー不要なぐらい見事に水をはじいてくれるので、ついつい・・・(＾＾；

露の身

８０歳になられるお一人暮らしの翁のお宅にお月参りに伺っています。

行く度にお茶を出して下さいます。夏場はアイス珈琲。

しかも氷が ♡ 型。彼が製氷機でこの氷を作っているかと思うと、なんとも愛しい気持ちがこみ上げてきます。

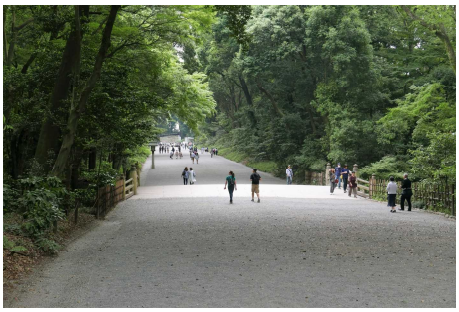
訶梨帝母

隣町のある通り沿いに、「おおくま歯科」と「こぐま歯科」があります。100 mも離れていません。最近の私の悩みの「種」です。ご存じの方は、寺務局まで…（後日、すでにあるテレビ番組で紹介されたことがわかりました。結果は…）

俊徳丸

５月に 10 数年ぶりに東京都内へ行きました。初めての明治神宮です。

空気感がとても心地よかったです。



征阿

九州の庵主さまから頂戴した焼酎が余りに美味しかったので、岐阜駅構内の食品店で同じ物を見つけた時には迷わず買い求めました。

旨いものは直ぐになくなります。残った容器の使い道を考えると、小さい方の甕にしておいて良かった。

私の拾骨の際には、喉佛だけはここへ入れて欲しい。きっと幸せな気分になるでしょう。

迷走坊

# 切なるお願い

当誌読者の皆様には、これから私の正直な弱音(毒)を吐き、坊さんの「本音」を語らせていただきます。人間、時にはこんなことも必要でしょう。少しの間、ご辛抱いただきますよう、お願い申しあげます。

今、7月14日夜、7月盆(新暦盆)の5日間の盆参りが終わり、安堵しつつ、この原稿を書いています。例年通り相棒M君と500軒弱の盆参りをしました。岐阜県では、美濃加茂市など東濃地方と岐阜市中心部の柳ケ瀬付近が新暦でお盆を迎えます。

8月盆との大きな違いと7月盆のお参りの難しさは、梅雨時のまだ体が十分に暑さに順応していない状態で臨まなければならない点です。特に昨年は、7月10日に岐阜県地方は「梅雨明け」となり、連日真夏の「カンカン照り」でした。7月盆で一度も傘を使用しないことは初めてです。私もこれまで「暑さ」を甘く見ていたことに気づかされました。「もう、若くないのだからと…」と、知人から忠告されていた矢先の出来事です。お参り最中に溢れ出る汗が止まらなくなり、やがて寒気がしてきました。意識が朦朧としてきましたが、お経だけは称え続ける我が身が不思議に思え、「蜃気楼」のような、ある意味貴重な体験をしました。

そんな命の危険を感じた昨年の経験から、今年は色々対策を致しました。まず基本中の基本、襦袢の下には、ユニクロ製の「エアリズム」を

着用すること。これは私たち数年前から常識とされていた事。更に今年、相棒M君は、移動中の日傘に「小型扇風機」付きのもの用意してくれました。そんなものが存在することも驚きですが、楽天で購入したそうです。初日はバカにしていたのですが、これが使用してみるとかなりの威力で、私も早々購入しました。

「風」は重要なポイントです。エアコンは、お部屋に入った瞬間は「涼しい！」と極楽浄土を感じますが、汗は全く引きません。団扇の風でも汗は止まります。汗が引けば体力も温存されます。是非、「扇風機」を御用意いただきたいと思います。しかし、ここにも問題点が…

檀家の皆さんは、僧侶の後方に扇風機を設置されています。そうすると、その風で蝋燭の灯が消えそうになり、そこで夫婦喧嘩が始まるパターンを多く見ました。僧侶後方に設置した奥さんが責められるのは気の毒です。それではどうでしょう、私の提案です。扇風機は出来る限りお佛壇と平行線上に設置し、斜め45度の角度でお坊さんに向けて風を送ることを提案いたします。この際、首降り機能は不要です。「直球」でお願いします。お坊さんの後方位置からの送風ですと、お坊さんの汗臭い風がお佛壇に直撃いたしますので避けたいところです。

最近の異常気象、寺方も命がけの「盆参り」です。何卒ご協力を願います。失礼しました。

俊徳丸

# 『私説法然伝』（１９）

法然誕生③

先月号では法然上人が比叡山を下りて嵯峨の清涼寺へ向かわれる決意をされたところまで書きました。

この嵯峨の清涼寺とは源氏物語にて主人公の光源氏が建立した「御堂」であるとも言われている寺院です。別名を嵯峨釈迦堂とも言い、釈尊在世のお姿を刻まれたと伝えられる三国伝来の釈迦像が古来より人々の信仰を集めていたのです。

**【嵯峨の清涼寺には身分の上下も老若男女も関係なくひたすら「佛」を求める人々にあふれていたという。法然上人はそこで七日間を過ごす。自らがもとめる「さとり」への到達を祈願するためであったと伝記には記されている。法然上人がそこで何を見て、何を聞いたのであろうか？　おそらくは比叡山では考えもしなかった光景ではなかろうか？比叡山延暦寺は女人禁制であった。形骸化しつつあったとはいえ、佛の教えを求める僧侶によって開かれた僧侶による僧侶のための聖域であった。嵯峨の清涼寺もまた「佛」を求める人々であふれていた。高貴な身分とされる人々も、女性も、老人も若者も区別なく、そこで「佛」を求めていたのである。その光景が法然上人に影響を与えなかったとは考えられにくい。確実に何かしらの影響・ショックを与えたに違いないのである。七日間の参籠の後、法然上人は再び「求法」の旅に出ることになった】**

法然上人は「求法」の成就の祈願のために嵯峨の清涼寺へ七日間参籠したのですが、個人的な見方ですが、法然上人は黒谷の経蔵に籠もり続けていることへの限界を感じられていたのではないでしょうか。つまりは従来の「求法」、方法論に対して限界点を見出されていたのではないでしょうか。

そして嵯峨の清涼寺での七日間は法然上人にとって極めて印象深い、また「視点」を変えるきっかけとなったとも考えられます。僧侶となり決められた方法論にて「さとり」を求めるというあり方からの脱却というものがこの嵯峨の清涼寺への参籠をきっかけとして起こってくる、そう私は捉えています。法然房源空という個人の問題から「人々」という視点への切り替えが発生したのではないでしょうか？

嵯峨の清涼寺へ集まる人々の姿が、誰しもが「佛＝さとり」を求めている、そう法然上人の目には写ったのではないでしょうか？

以下次号に続く（征阿）

嵯峨の清涼寺への参籠の様子

我が家、古い井戸があります。長きに渡り使われていたようですが、近年十五年程使われていませんでした。四年前、庫裏をリフォームする際に井戸の存続を検討し、開けて見ると枯れていませんでしたので、ならばと早速井戸さらいをし、ポンプを設置。管をめぐらせ、現在では庭は無論の事、墓地、キッチン、洗濯機などで大活躍です。特にこの時期、冷たい井戸水は心も潤う恵みの水です。墓石に手向けると、佛さま達の喜ぶ声が聞こえるようです。木々も鳥達も嬉しそうですが、唯一プール遊びには不向きらしく、毎回クチビルを紫にしているのは三歳の小坊主です。

井戸と言えば…

能で『井筒』という曲があります。「これは諸国一見の僧にて候」と始まり、この僧が立ち寄った奈良の在原寺でのお話。

寒村無住の古寺。夜も更けゆく中、一人の女性が傍らの井戸で清水を汲み塚に手向け、一心に念じている様子。怪しい…狐狸の類いか？

何をしておられる、と声を掛けると女は、「私は近在の者。ここは『昔男』と呼ばれた有名な業平の塚。古い話ゆえ委しくは知らないけれど、何かの縁と思い花水を手向け弔っています」と。では業平の旧跡で彼を偲びましょう。何か物語を聞かせてくれまいか、と僧に乞われて語り始める女。

## こもりうた⑲

昔々、この井戸の傍らで幼き頃に業平と一緒に遊んだ女の子が後に妻となった事。業平が浮気をして夜な夜な山を越えて出かけた事。妻は浮気を知っていても知らぬふりして、なおかつ竜田山を夜半に越える彼の身を案じていた事。その妻の優しさに気づいた業平がふっつり浮気をやめた事など。委しく知らないとおっしゃるわりに、いやいや相当お委しい！貴女はもしや、と問えば「恥ずかしながら我なり」と、井戸の底に消えて行きます。

後半、女の亡霊（能の後シテはだいたい亡霊か狂人か神がかり）が業平の形見の冠と直衣を着けて、夢見ごこちの僧の前に登場。二人の愛を語り、清絶に舞います。

井筒（舞台正面の作物）をフッと覗く女。水鏡には業平の面影。さらに見入って「見れば懐かしや」と謡う。風情のある見所です。

やがて暁の鐘の音とともに、幻のように消え去り、僧はしみじみと寺を後にします。

筒井筒
井筒にかけしまろがたけ
生ひにけらしな
老いにけるぞや

ちなみに、我が家の井戸は、電気ポンプを付け蓋をしてしまったがゆえに、すこぶる便利ではありますが、まったく風情のない井戸に成り果ててしまいました。

訶梨帝母

# 弱い者いじめ

「爆買いの中国人は、よくテレビに出てるけど、日本を訪れる外国人の数は、うなぎ登りに増えてるらしいね」

「ああ、京都をはじめ観光地は、外国人だらけみたいだな」

「その外国人を運ぶ大型バス。これの駐車問題が深刻化してるらしいよ」

「え？どんな風に」

「どんな風にって、観光客を運ぶバスは、客が買い物をしてる間や、寺社なんかに参拝してる間、駐車場が埋まっていたら、長時間路上駐車することになるよね。で、他の交通の妨げになったり、交通事故を誘発したりしてるっていうんだ」

「ああ、確かにそれは危ないよな。私がよく通る道も有名な観光スポットがあって、大型バスがよく停まってるんだけど、本当に危ないんだ。大迷惑だよ、あれは（怒）」

「でさ、この前、テレビでそれの特集をやってたんだよ」

「あ、そう」

「京都や浅草、大阪のミナミなんかで取材してたんだけどさ、大型バスの運転手に問うわけ。『ここは駐車禁止ですよ』とか、『みんな大迷惑してるじゃないですか！』とか、『事故が起こったらどうするんですか！』とか結構厳しい口調で言ってるわけ」

「まあ、でも、言ってることは、もっともなことだわな。で、運転手は何て答えていたの？」

「皆、悪いとは思ってるみたいで、何も言わずに、申し訳なさそうにバスを発車させてその場から去る人が多かったな。ただ、『そんなこと言ったって、あんた、停める場所がちゃんとあって、こういう路上駐車してるならいくらでもお叱りを受けるが、実際どうだね？あるのかね？あったら教えてくれよ！俺そこに停めるから。

だいたい、国や自治体が外国人観光客誘致誘致って力入れてるくせに、この問題については、まるっきり手を打とうとしてないんだもの！お宅らさ、そっち（国）に取材行ってさ、今、俺らに啖呵切ったように言ってみなよ！』って、インタビュアーに食ってかかってた運転手もいたな」

「食ってかかる、と言ったって、それ正論じゃないか？その運転手が言うように、国や自治体にこの問題を問い質し、重い腰を上げさせる。そっちの方がよっぽど建設的で問題解決の近道になるんじゃないか」

「うん、私もその番組見てて何か弱い者いじめを見てるような感じになって、気分が悪かったよ・・・

マスコミは強いものにこそ、向かって行かなきゃいかんのにな・・・。哀しいね・・・」

（露の身）

# 地獄の季節だ

「地獄の釜の蓋も開く」という表現をお聞きになったことはありませんか。

正月やお盆の十六日には、地獄の獄卒も罪人への責め苦を休むというところから、この二日間はこの世の人々も仕事をやめて休もうということです。

ただ、民間信仰はほとんど聞き覚えですから、「地獄の釜の蓋が開いて、先祖が帰ってくる」とか、「蓋が開いているから悪いことをすると投げ込まれる」と思っている人もおられることでしょう。

日本人に地獄の恐ろしさを教え、今日まで影響を与えたのは、平安時代の天台宗の学僧・念佛僧である源信僧都が著した『往生要集』であると言われています。

人間世界はは苦しみが多い穢土である。そこを出て（厭離穢土）、極楽浄土に生まれることを求めよ（欣求浄土）。そのためには念佛を称えよと説いています。

その他様々な経論の中で地獄が説かれますが、中でも『正法念処経』の描写は微に入り細に入って実におどろおどろしい。

お寺で絵解きされる「地獄変相図」などはほぼこの記述に添っています。地獄のガイドブックとしてはミシュラン級です。

善いことをすれば福楽を、悪業をなせば苦しみを、結果として受けることになる。これが佛教の基本ですが、人間の欲望は限りなく深いので、因果応報を人々に理解してもらうために、抽象的な地獄ではなく、克明に描写する必要があったのでしょう。

宗祖法然上人は、地獄・六道・悪業などの言葉を使われることはあっても、それは阿弥陀佛の尊さ、称名念佛の大切さを伝えるためで、怖い教えはでてきません。

でも、友引町内会の住人は全員食いしん坊であり、下戸ではありません。つまり、地獄へ堕ちる資格は充分あるのです。もし、落語の「地獄八景亡者の戯れ」に出てくる地獄なら、休みを取って訪れてみたい！

通夜法要の後、私たちは「人間は死ぬのではない。極楽へ往き生まれるのです」とお話をします。皆さんしんみりと聴いておられます。ところが、翌日の葬儀・告別式の後、棺を花で一杯に飾って蓋が閉まる前に、亡き方に向かって叫ばれ方がいます、「ええとこへ行きや～」。

あれは、地獄にだけは逝ってくれるなという強い願いでしょうか、それとも「行くかも知れない」という密かな思いでしょうか。

地獄の釜の蓋が開く日はいつでしょう。十六日だけという説と、お盆に帰ってくるためには七月一日（旧暦）には開いていないと間に合わないという説があります。

では地獄の釜の蓋はいつ閉まるのかというと、更にはっきりしません。九月には、地獄への帰宅困難者になってしまった亡者がウロウロしているかも知れませんねぇ。

迷走坊

# 観経物語（９７）

正宗分（しょうじゅうぶん）その51

第十一勢至観（せいしかん）その１

《本文その１》

次ぎに復た、大勢至菩薩を観るべし。

此の菩薩の身量の大小は、亦、観世音の如し。円光の面は各々百二十五由旬にして、二百五十由旬を照らす。挙身の光明は十方の国を照らし、紫金の色を作す。有縁の衆生は、皆、悉く見ることを得る。但、此の菩薩の一毛孔の光を見るのみにして、即ち十方無量の諸佛の浄妙の光明を見る。

是の故に、此の菩薩を号して、無辺光と名づく。

智慧の光を以て、普く一切を照らし、三途を離れて、無上の力を得さしむ。是の故に、此の菩薩を号して、大勢至と名づく。

《意味・訳文》

次ぎにはまた、大勢至菩薩を観想しなさい。この菩薩の身体の高さや身幅の大きさは、観世音菩薩と同じである。その円い後光は、縦横ともに、百二十五由旬であり、二百五十由旬の範囲を照らし出している。全身から放たれる光明は、十方の（佛）国（土）を照らし、紫を帯びた金の光をしている。有縁（＝佛に救われるという前世からの因縁をもつ）の衆生は、皆、残らずこの光明を見ることができる。また、ただこの菩薩の一つの毛孔（毛穴）から出る光を見れば、そのまま十方の無数の諸佛が放つ、清浄で微妙な光明を、見たことと同じになる。

大勢至菩薩像

それ故に、この菩薩のことを名づけて、無辺光（＝無際限まで光り照らす）とも呼ぶのである。その身に備わった智慧の光をもって普く一切の衆生を照らして、三途（＝地獄・餓鬼・畜生の三悪の処・境涯）から離れさせ、無上（＝比べる事が出来ない程）の力を得させるのである。

このため、この菩薩のことを号して、大勢至（＝大きな衆生済度の力を発揮してもたらすもの）とも呼ぶのである。

《私訳》

ここでも釈尊（＝おシャカさま）は繰り返し阿弥陀佛（＝無量寿佛）と、観音菩薩と勢至菩薩が同質でありながら、私たちのために、色身という表現を用いて、佛と菩薩の表情や、見た目の姿の違いを際出させたり、阿弥陀佛の万能で全般的な働きの中から、智慧と慈悲という働きの部分を、両菩薩に持たせて、分かりやすさうや親しみを見せつけられています。さらに、勢至菩薩の放つ光明を見れば他の佛の光明を見るのと同じであるとも言われ、究極のところ、佛は全て同じということを述べておられるのです。

《幽思房》